

# 留学案内

## STUDY-ABROAD INFORMATION



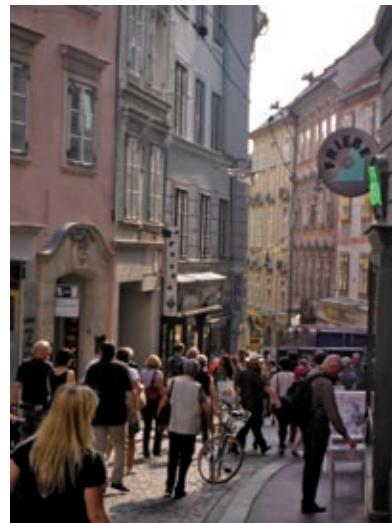
### 海外の大学と交換留学協定を結んでいます。

国際文化学研究科は海外の大学と協定を結び、学生の交換を行っています。協定による留学は、私費留学とは異なり、以下のようなメリットがあります。

- (1) 授業料：留学先大学の授業料が免除されます（ただし、神戸大学に規定の授業料を支払わなければなりません）。
- (2) 単位互換：留学先で取得した授業の単位について、審査を経て、本研究科の単位として認定される制度があります。
- (3) 修業年限：留学中も神戸大学に在籍中と見なされるので、前期課程の場合は1年間（または半年）の留学期間を含めて最短2年で、後期課程の場合は最短3年で修了することができます。

(1) の留学先の授業料免除は、当該国の大学制度や物価によりさまざまで、大きなメリットになる場合とならない場合がありますが、一般に欧米の大学は留学生から高額授業料を徴収しており、授業料が免除されることは大きなメリットといえます。(2) 及び (3) は協定による留学ならではの利点です。奨学金は日本学生支援機構、神戸大学独自の渡航費と滞在費の一部を補助する奨学金があります。

派遣学生の選考は、次の4点を基準に国際交流委員会が筆記試験及び面接で行っています。(1) 研究目的・計画 (2) 言語能力 (3) 適性 (4) 文化交流。なお、英語圏に留学する場合は要求されている TOEFL 又は IELTS のスコアをクリアしなければなりません。



### 下中 隆太郎さん

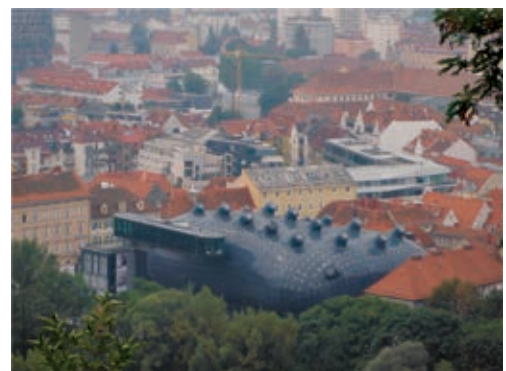
(博士前期課程2年)

神戸大学国際文化学部卒業

研究テーマ：「H・アーレント晩年のカント判断力論」

半年間のリモート留学での私の目標は、ドイツ語力向上はもちろん、ドイツで現在、近現代ドイツ哲学、なかでも政治哲学がいかに論じられているのかを知ること、そして哲学の専門的知見を高めることでした。

ライプツィヒ大学哲学科では、授業の種類が豊富で、学生と教員数が多いこともあって、活発な議論を、しかも割と和やかな雰囲気の中で交わすことができました。ライプツィヒの哲学科の特徴として „Forschungskolleg Analytic German Idealism” という研究機関が設置されており、ドイツの古典哲学（主にドイツ観念論）を、いわゆる英米系の分析哲学的手法で読解する試みが盛んなことが挙げられます。言ってみれば大陸哲学と英米系分析哲学の架橋、という最先端かつスリリングな知的挑戦がなされている環境に身を置くことから多くの刺激や気づきを得ました。最先端と言っても目先の流行に流されるのではなく、古典の一言一句に向き合うことが求められます。さらに、教員や学生たちの間でも研究手法や考え方の違いがあり、多角的に議論を深化させることができ、上述した読解方法の限界について批判的に検討する目も養われたと思います。たしかに現地ではしか得られない経験もありますが、リモート留学であっても、充実した教育・研究体制の恩恵に少なからず与ることができ、当初の目標は一定程度達成されたと思います。



# ダブルディグリー・プログラム

## DOUBLE DEGREE PROGRAM

本研究科には、ダブルディグリー・プログラムがあります。これは本研究科に在学中の大学院生が留学先研究科に最低1年間留学し、所定の単位を修得して修士論文を提出することによって、最短2年間で修士の学位を本研究科及び留学先研究科において取得できるプログラムです。

それぞれの研究科で取得した単位の一部は互換され、カリキュラムも連携しています。授業料等については、本研究科の学生は神戸大学に支払うだけで、留学先研究科では免除されます。

### ■派遣大学

ナポリ東洋大学（イタリア）、パリ大学（旧：パリ・デイドロ大学）、ルーヴェン大学（ベルギー）、ハンブルク大学（ドイツ）、フランス国立東洋言語文化学院（INALCO）

### ■派遣人数

各大学1～2名

### ■出願資格

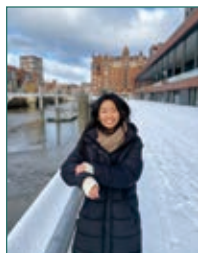
- （1）国際文化学専攻前期課程に所属していること
- （2）派遣大学の語学要件等を満たしていること
- （3）指導教員より推薦を受けられる者

### ■派遣学生の選考は、次の3点を基準に書類および面接で行います。

- （1）研究計画、（2）語学力、（3）適性

### ■受入学生の研究テーマ：「現代の日本における『メイド・イン・イタリア』」、「Japan's cultural diplomacy in France」など。

### ■派遣学生の研究テーマ：「EUの社会的通商政策の形成過程」、「ヨーロッパの高等教育改革と各国のマイノリティへの対応」など。



小林 睦さん

（博士前期課程3年）

神戸大学発達科学部卒業

研究テーマ：「アマチュアオーケストラ活動を支える社会文化的環境 ―ドイツと日本の大学オーケストラに焦点を置いて―」

私は学部生のころ、ハンブルク大学に1年間留学しました。留学生向けの授業を受講する傍ら、ハンブルク大学交響楽団にも所属して、神戸大学交響楽団との違いなどを肌で感じました。帰国して大学を卒業し、修士課程進学後、ドイツと日本の文化的環境の相違点・相似点についてさらに知りたいと考え、ハンブルク大学とのダブルディグリー・プログラムに応募しました。

ハンブルク大学での正規学生として授業は大変なものでしたが、それをなんとかこねせたのは、指導教員の先生の丁寧な指導と留学以前に知り合っていたドイツの友人の支えによるのが大きかったと思います。

ハンブルクに行きついたら、新型コロナがドイツでも流行り始め、大学も閉鎖されることになりました。学長はそれに対して、「大学は本来政府から独立していることが絶対の義務であり、政府の指令に従うようなものではないのだが、今回の新型コロナの問題に対処するためにはこのような措置は避けがたい」といったことについての長大なメッセージを学生に向けて発信していました。ナチスを経験したドイツの大学では、何よりも大学の独立が重視されるのだということを深く感じさせるメッセージでした。留学時期はコロナ禍と重なり苦しかった時もありましたが、両大学の先生方のご尽力のおかげで研究にはげむことができました。両大学の諸先生には心より感謝しています。

プログラムを通して、実際に神戸とハンブルクの大学オーケストラで参与観察や質問紙調査を行い、それらの調査を土台に、両国のアマチュア音楽活動の背景にある社会文化的環境を明らかにする修士論文を執筆しました。ドイツの文化に日常的に触れられる環境で学ぶことができ、その経験も踏まえ、日本語とドイツ語で論文を書けたのは、非常に貴重な経験だったと思います。

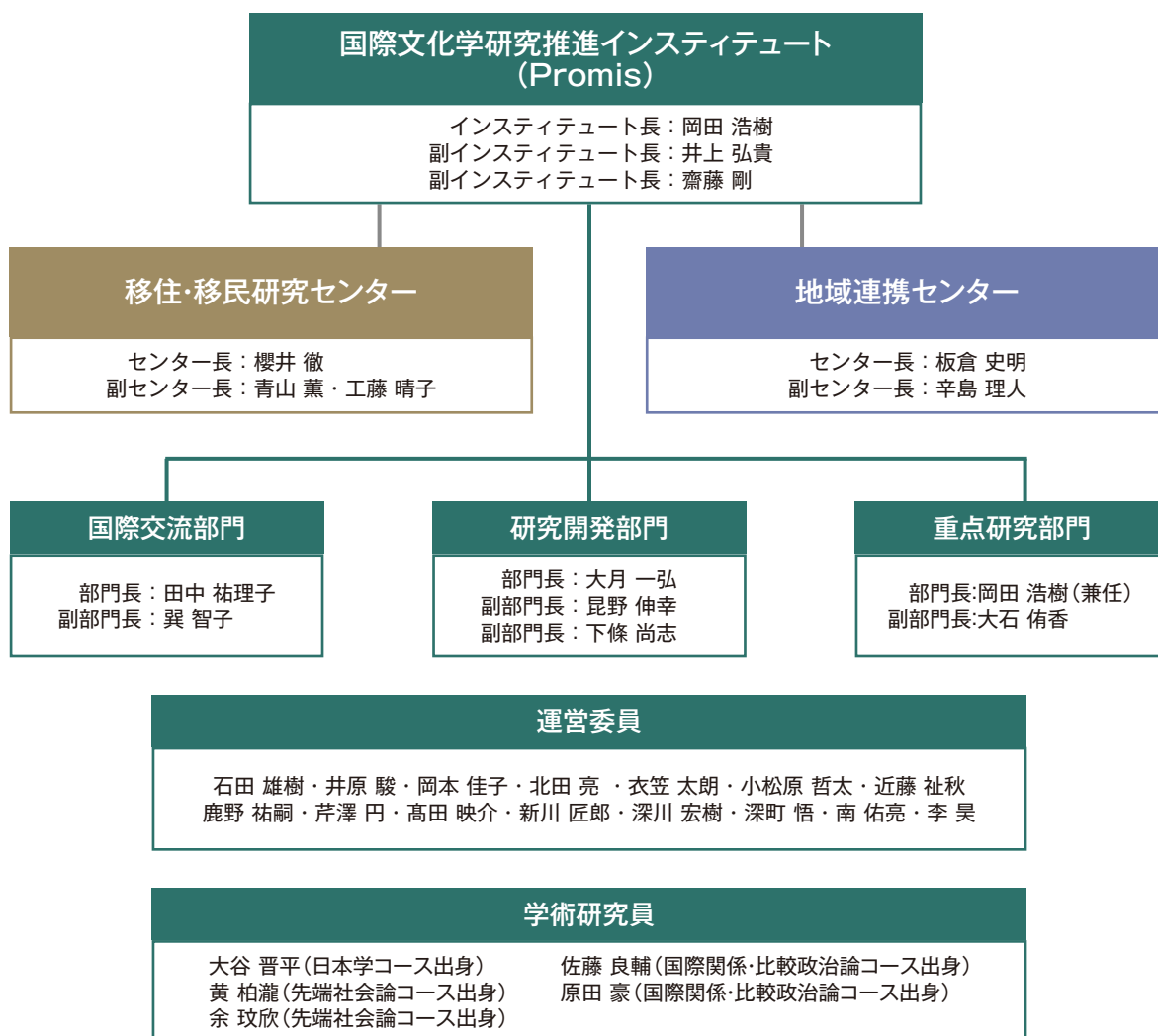
研究科協定校一覧		
ロンドン (SOAS)	イギリス	全学協定
エセックス		全学協定
バーミンガム		全学協定
マンチェスター		
ケント		全学協定
ユタ州立	アメリカ	
ニューヨーク市立クイーンズカレッジ		全学協定
ジョージア工科大学		全学協定
テネシー大学		
ヒューロン・ユニバーシティ・カレッジ		
オタワ	カナダ	全学協定
ブラジリア	ブラジル	
ハンブルク	ドイツ	DD プログラムあり
ベルリン自由		
ライプツィヒ		
ハレ・ウィッテンベルク		
トリアー		全学協定
キール		全学協定
ダルムシュタット工科大学		全学協定
ミュンヘン工科大学		全学協定
グラーツ	オーストリア	全学協定
ライデン	オランダ	全学協定
ルーヴェン	ベルギー	DD プログラムあり
サンルイ		
ヘント		
ブリュッセル自由（仏語系）		
ブリュッセル自由（蘭語系）		全学協定
グルノーブル・アルプ	フランス	
レンヌ第1		
パリ第2		全学協定
パリ（旧：パリ第7）		全学協定
パリ・ナンテール（旧：パリ第10）		DD プログラムあり
フランス国立東洋言語文化学院 (INALCO)		全学協定
リール		DD プログラムあり
エクス＝マルセイユ		全学協定
ニューカレドニア		全学協定
ボローニャ	イタリア	全学協定
ボローニャ（フォルリ）		
ヴェネツィア		全学協定
ナポリ東洋		DD プログラムあり
バーゼル	スイス	全学協定
バルセロナ	スペイン	全学協定
バルセロナ自治		
ベルゲン	ノルウェー	
ヘルシンキ	フィンランド	
カレル	チェコ	全学協定
ワルシャワ	ポーランド	
ニコラウス・コペルニクス		全学協定
ヤゲウォ		全学協定
エトヴェシュ・ロラード		全学協定
バベシュ・ボヨイ		全学協定
ソフィア	ルーマニア	Erasmus+ プログラム
サンクトペテルブルク	ブルガリア	全学協定
ウラル連邦	ロシア	全学協定
ウーロンゴン		全学協定
西オーストラリア		全学協定
クイーンズランド		全学協定
ニューサウスウェールズ		全学協定
カーティン	オーストラリア	
武漢		全学協定
上海交通		全学協定
清華		全学協定
南京		全学協定
華東師範		
中国人民		全学協定
浙江		
香港		
北京外国語		
中央民族	中国	
国立台湾		全学協定
国立政治		全学協定
国立成功		全学協定
ソウル国立		全学協定
済州	韓国	
中央		
国立釜山		
モンゴル国立		全学協定
ベトナム国家（ホーチミン）	モンゴル	全学協定
アテネオ・デ・マニラ	ベトナム	
タマサート	フィリピン	
ガジャ・マダ	タイ	
南洋理工	インドネシア	
	シンガポール	全学協定

# 国際文化学研究推進インスティテュート

## RESEARCH INSTITUTE FOR PROMOTING INTERCULTURAL STUDIES (PROMIS)

2022年4月、国際文化学研究推進センターは国際文化学研究推進インスティテュート(Research Institute for Promoting Intercultural Studies, Promis)に発展的に改組し、そのもとに移住・移民研究センターと地域連携センターを設置するとともに、研究開発部門、国際交流部門、重点研究部門の3基幹部門を置くことになりました。この新しい統合的組織のもとで、国際文化学研究推進インスティテュートは国際文化学研究科の研究プラットフォームとして、さらなる今後の取り組みを進めていきます。

### 国際文化学研究推進インスティテュート(Promis) 組織図



名前 清川 祥恵さん

所属コース 2012年度文化相関専攻ヨーロッパ・アメリカ文化論コース博士後期課程修了

研究テーマ 「ウィリアム・モリスの文学作品における中世主義」

2013年度より、Promisの前身である異文化研究交流センターや国際文化学研究推進センターに学術研究員・協力研究員として在籍、2021年度より連携フェロー。現在、佛教大学文学部(講師)。

国際文化学研究科で基本的な知識や手法を身につけ、博士号を修得すると、晴れて一人前の研究者となり、以降これまで「先生」だった研究科教員や先輩方もある種対等な仲間となります。国際文化学研究推進インスティテュート(Promis)では、互いに様々なノウハウを共有しながら、協力し合って研究を進めていくことができます。実際に私も、研究プロジェクト助成制度を利用して研究科の先生や院生時代の先輩方との複数の共同プロジェクトを組み、科研費の取得や論集の出版といった成果につなげることができました。

Promisの活動に携わることで培える企画力、組織力、実務能力(各種申請書の作成、広報、ウェブサイト管理、オンライン／対面会議の開催・補佐、論集編集等)は、研究者にも多様なスキルが要求される今日、未永く研究活動を続けていくために、またアカデミアでのキャリアを築いていくにさいしても、確実に自分の助けとなるものです。博士課程修了後の道行きは誰にも定められていないからこそ、着実かつ持続的な旅の第一歩を Promis の仲間と踏み出せたことは、今も私にとって大きな糧となっています。

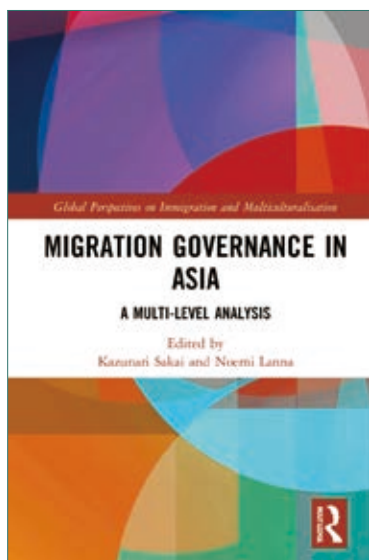


## 移住・移民研究センター

2016年度から2021年度まで、日本学術振興会の研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）として「日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成」が採択され、国内外の研究ネットワークを構築しながら研究が進められてきました。この研究プロジェクトを発展させるかたちで、2021年10月からは日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（学術知共創プログラム）」として「移住・移民の常態化を前提とする持続的多文化共生社会の構築」が採択され、移住・移民研究センターが中心となってこの研究プロジェクトを推進していきます。この研究プロジェクトは、人文社会科学を核としつつ、自然科学との協働を通じてグローバルに展開する移住・移民をめぐる諸課題に取り組むものです。



移住移民のワークショップの様子



英語による学術成果の刊行

## 地域連携センター

異文化研究交流センターの時代から、アートマネジメントをつうじた地域とのかわりや、兵庫県国際交流協会、神戸市定住外国人支援センター、南あわじ市といった諸団体との連携を進め、2009年には南あわじ市と包括連携協定を締結するに至りました。国際文化学研究推進センターの時代には、神戸映画資料館、公益財団法人淡路人形協会、宇宙航空研究開発機構（JAXA）といった諸団体との連携を深めてきました。地域連携センターでは、神戸大学の地域連携推進本部とも緊密に連絡をとりあいつつ地域連携をさらに組織的に深化させ、従来からの映画研究や多文化共生のフィールドワー

ク調査にくわえて、観光まちづくりといった新しいテーマに取り組みの幅を広げていきます。

## 研究開発部門

研究開発部門では、国際文化学研究科所属の教員、あるいはPromis学術研究員や協力研究員が中心となって企画するセミナーの開催や広報をサポートするほか、Promisが公募する研究プロジェクト等の選定、修士論文・修了研究レポートの収蔵管理をおこなっています。また、神戸大学学術研究推進室（URA）と連携して、科学研究費助成事業をはじめとする外部資金申請のための支援をしています。2021年度の研究プロジェクト（移民研究プロジェクトを含む）は以下の通りです（肩書は2021年度現在）。

- 新しい「神話的物語」の創生と日本ポップカルチャー（代表：植朗子協力研究員）
- 多文化共生における信頼感に関する国際比較研究—日中比較研究を中心に（代表：林萍萍協力研究員）
- 近現代ドイツにおける地理的「中間Mitte」の思想史：「中間民族Mittelvolk」自己像の生成と類型（代表：野上俊彦協力研究員）
- 日本人学習者の中国語第三声習得に関する研究（代表：呉琪協力研究員）
- 「モノ」のエスノグラフィー：アート、伝承文学、エコロジーにおけるポスト・ポストヒューニズムの探求（代表：小林瑠音学術研究員）

## 国際交流部門

国際交流部門では、国際文化学研究科と緊密に連携をとりつつ、海外の研究機関と学術協定締結をおこなっています。これまでに、チアパス自治大学先住民研究所（メキシコ）、マヒドン大学人口社会研究所（タイ）、アムステルダム自由大学社会学部／社会学研究科（オランダ）と協定を締結し、国際ワークショップ・シンポジウムの開催や研究者間交流を進めています。

## 重点研究部門

重点研究部門では2022年度、大学共同利用機関法人人間文化研究機構のネットワーク型基幹研究プロジェクトである「グローバル地域研究推進事業」を推進していきます。

## 学術研究員

各年度、国際文化学研究科博士課程後期課程で学位を取得した者のなかから若干名を学術研究員に採用しています。学術研究員には研究者番号が付与され、Promisにて各種の研究プロジェクト等に従事するとともに、事務補佐員とともにPromis事務局を構成し、国際文化学研究推進インスティテュートの管理運営を担っています。

## 協力研究員

各年度、国際文化学研究科博士課程後期課程で学位を取得した者を協力研究員に委嘱しています。協力研究員には研究者番号が付与されるほか、Promisが公募する研究プロジェクト等に研究代表者として応募することができます。海外大学院に在籍する若手研究者がPromisで研究に従事するための客員協力研究員の制度もあります。

## 連携フェロー

国際文化学研究科ないしは国際人間科学部に過去に在籍した教員、あるいは国際文化学研究科博士課程後期課程で学位を取得し、他大学にて専任教員の職を得た者を連携フェローに委嘱しています。連携フェローは、Promisが推進する各種の研究プロジェクトの研究分担者や研究協力者として、Promisの国内外の研究ネットワークの一翼を担っています。